

「ガラス戸」からの写生

— 一つの子規試論 —

復 本 一 郎

一、「ガラス障子」

やや唐突であるが、日本における本格的な「板ガラス」の生産は、明治四十年（一九〇七）、岩崎俊弥によって設立された旭硝子株式会社によつてはじめられたという（小学館『日本大百科全書』、講談社『日本人名大辞典』（小学館））。ただし、技術の未熟さなどから、値段は高価であつたという（小学館『明治時代館』参照）。正岡子規が、数え年三十六歳で没したのは、明治三十五年（一九〇二）のこと。

明治三十二年（一八九九）十二月十一日付の高浜虚子宛子規書簡の一節に次の文言が見える。

硝子窓のきゝめ已に昨夜よりあらはれ、非常に暖かく候。今日は終日浴光、自らガラスを拭くなど大機嫌に御座候。菅笠を被つて机に向ふなど、近来になき活撥さにて、為に昼の内に原稿を書き申候。

今、読み易さを考えて、筆者によつて、適宜、句読点、濁点、振り仮名等を施した（以下の引用文も同じ）。右の文章から推測すれば、上根岸町八十二番地の子規庵に

「硝子窓」が設置されたのは、明治三十二年（一八九九）十二月十日のことと思われる。子規の燥ぎ様が、眼前に髣髴する。河東碧梧桐が『子規を語る』（汎文社、昭和九年二月刊）に掲出する子規庵の「看取図」によると、子規が病臥していた六畳の「病間」の南側には「ガラス戸四枚」と記されている。隣の八畳の「座敷」は「障子四枚」、その前が廊下となつている。「ガラス戸四枚」が入る前は、恐らく障子、そして雨戸が設えられていたのであろう。先にも記したように、この時期、まだ日本製の「板ガラス」は、ない。欧米産の高価なものであつたと思われる。

この「硝子窓」を設置したのは、先の書簡の名宛人の虚子。虚子は、大正四年（一九一五）五月に、子規を主人公としての伝記的小説『柿二つ』（新橋堂）を出版しているが、その中で子規（小説中では、イニシャルでS、あるいはNと表記されている）をして「Kが拵へてくれたのです。」（Kは、虚子のイニシャル）と語らしめている。『柿二つ』の第十一回は、「ガラス障子」の章。冒頭

部に、先の書簡が参照されていると思われる左の一節が見える。少し長くなるが、虚子の文章は、弛みがない。味読していただきたい。

今年の冬の寒さが新あらたに問題になつた時、Kは、庭に面した南の障子をガラス障子に替へたら暖かだろうと言つた。天気さへよければ一日ひ日が当つてをるのであるから成程ガラス障子にしたら暖かだらうと彼（筆者注・子規）も考へた。

此病室の凡ての物に不似合な手荒な物音をさせて居た建具屋が四枚の新しいガラス障子を箝はめて歸つて行つたのは十二月の初めであつた。

今迄障子を開けねば見えなかつた上野の山の枯木立も、草花の枯れて突立つてゐる冬枯の小庭も手に取るやうに見えた。暖かい日光は予想以上に深く射し込んで来て、病床に横よこたはつた儘ままで日光浴が出来た。

彼は蒲団をガラス障子の近まじ処じよ迄引張らせて、其蒲団の上うへに起上つて、ガラスの汚れたのを拭き始めた。

「そんな事をおして又熱でも出ると大変ぞな。」と老いたる母親は心配した。

彼はかまはずガラスを拭いた。余り日がよく当るので彼は少し上の気げせて来た。壮健な時の樂しかつた旅行の記念に何年か病室の柱に吊して置いた菅笠すががさを

取らせて被かぶつた。

此この珍らしい機嫌はいつも曇つてゐる此一家内の空気を晴々とした。親子三人揃そろつた笑声わらひごゑが暫くの間聞きこえた。

虚子の小説は、夏目漱石をして「余裕がある」と言わしめてゐる。その漱石の長文の「序」を得て、短篇小説集『鶏頭』（春陽堂）が公刊されたのは、明治四十一年（二九〇八）一月のことであつた。以後、小説家として多くの佳品を執筆した虚子であつたが右の一節からも虚子の小説家としての力量が十二分に窺みち知し得るのである。子規の書簡の二、三行は、右のごとく丁寧ていねいに形象化けいさうかされているのである。

この「ガラス障子」の章の中には、「ガラス障子」によつて子規の一句が誕生する過程が、左のように記されている。

ガラス障子が箝はつてから二三日目の事であつた。

今日は朝からの曇り日和で、ガラスを通して射込んで来る日光も無ければ、ガラス越に見る上野の森の色も小庭こにわの色も灰色の冷たい一色であつた。彼（筆者注・子規）は見るともなく庭の面おもを見てゐると、いつの間にか一匹の野良猫が長い尾を垂らした儘で隣の庭から垣根を潜こつて此方こなたへ遣やつて来た。さうして茨ばらや鶏頭の枯れくに突立つてゐる花壇の間に立

つて辺りを見廻してみたが、躑^{やが}て其処^{そこ}に糞^{ふん}をしはじめた。

野良猫の糞してゐるや冬の庭

といふ句が別に考へるでもなしに出来た。糞をしてしまつた猫は又長い尾を垂らした儘悠々と彼方^{かなた}へ去つてしまつた。

〈野良猫の〉の一句は、子規の自筆句稿『俳句稿』の明治三十二年（一八九九）の「冬」の「時候」の部に収められている。虚子は、一句成立の場に居合わせたものであるうか。虚子が描写しているように、病臥の子規にとつて「ガラス障子」があつてこそその「写生」句であろう。これは、あくまでも小説『柿二つ』の中の文学化された一シーンであるが、病臥の子規にとつて、そして「写生」を唱えた子規にとつて、虚子が設^{しら}せてくれた「ガラス障子」は、子規最晩年の二年半余の俳句、短歌二つながらの「写生」を支えるものであつたのである。

明治三十二年（一八九九）十二月十四日付水落露石宛子規書簡が、「ガラス障子」からの「写生」俳句を報告している。短い書簡なので、全文引いてみる。露石は、明治五年（一八七二）大阪生まれの子規門の俳人。子規より五歳年少。明治三十三年（一九〇〇）十一月、『蕪村遺稿』を編集・出版した人物として知られている。この書簡時の露石の住所は、京都市三本樹。

御無沙汰致候。御病氣如何に候哉。ゆるく御保養可然候。小生もさしたる事は無之候へども、今年はひどく弱り居候。此頃、病室の障子をガラス張に致候処、非常の暖氣にて稍蘇の思有之候。貴兄も暖き室に御籠り可被成候。時々葉喰は必要に御座候。小生、平生持論の御馳走論、此頃ホト、ギスの消息の中に載置候。御一覽下され度候。蕪村忌につき蕪御送被下候由、難有奉存候、今年は、蕪村忌の写真とり度と存居候。玉稿甚だ遅延申訳無之候。以上

十二月十四日

規

露石君

ガラス窓に鳥籠見ゆる冬籠

ガラス越に冬の日あたる病間哉

寒さうな外の草木やガラス窓

鳶見えて冬あた、かやガラス窓

ガラス窓に上野も見えて冬籠

即吟、御一笑。

四明先生へ御面会の節、よろしく御伝声奉願候。

書簡末の「四明先生」は、子規と親交を結んだ京都出身の俳人。嘉永二年（一八四九）生まれであるので、子規より十八歳年長。長者への礼を尽くす子規が「四明先生」と呼んだゆえんである。先の虚子宛書簡より三日後のこの書簡でも、子規は、露石に、嬉々として「病室の

障子をガラス張に致候処、非常の暖氣にて稍蘇の思有之候」と伝えてるのである。先に虚子が『柿二つ』の中で「今年の冬の寒さが新あたになつた時、K（筆者注・虚子）は、庭に面した南の障子をガラス障子に替へたら暖かだらうと言つた」と綴つていたように、「ガラス障子」にした主たる理由は、寒さ対策であつた。が、その結果の福音として、「ガラス障子」が病臥の子規に眺望を齎もたらしたのである。それによつての露石に披露された五句の「即吟（写生）」だつたのである。書簡、就中、五句の作品からは、子規の喜びが伝わってくる。

子規は、明治三十二年（一八九九）一月刊の『俳諧大要』（ほとゞぎす発行所）において、「修学第一期」の末尾に去来、李由、惟然、許六、涼菟、尚白、正秀、その、凡兆、樽良等十名の作品十九句を掲げ、

以上の句は、皆句調の巧を求めず、只ただありのまゝの事物を、ありのまゝにつらねたる迄なれば、誠に平易にして、誰にも分るなるべし。而して其句の価値を問へば、即ち多くは是れ第一流の句にして、俳句界中有数の佳作なり。

と記している。かかる作品が、子規にとつての「佳作」の「標準」（基準）であつたのである。先の露石宛書簡中の五句など、まさしくこの「標準」に当てはまる「ありのまゝの事物を、ありのまゝにつらねたる」ところの

「平易」な「写生」句と言つてよいであろう。説明は不要と思われる。ちなみに、子規は、書簡中で「蕪村忌」に触れ、蕪を送るといふ露石に礼を述べているが、明治三十二年（一八九九）の子規庵での「蕪村忌」（第三回）は、十二月二十四日に営まれている。その際振舞われた昼過ぎの「風呂吹」が露石が送つた蕪というわけであろう。

子規は、露石宛書簡を認めた三日後の明治三十二年（一八九九）十二月十七日付で、今度は、熊本在の親友夏目漱石に対して「ガラス障子」のことを報告している。よほど嬉しかったものであろう。冒頭、次のように報じている。

拜啓 永々の御無音、如何御暮被成候や。小生もまづぐゝ無事二相くらし申候。煖炉の事、難有候。先日、ホト、ギスにて灯炉といふを買ってもらひ、且つ病室の南側をガラス障子に致してもらひ候。これにて暖氣は非常二違ひ申候。殊二昼間、日光をあびるのが何よりの愉快に御座候。こんな訳ならば二、三年も前にやつたらよかつたと存候。併しか何事も時期が来ねば出来ぬ事と相見え候。

先にも記したように「ガラス障子」設置の主目的は、あくまでも「暖氣」を確保するためであつた。

明治二十八年（一八九五）の冬、当時、松山在の漱石は、十二月三十一日上根岸町八十二番地の子規庵を訪問し

ている（翌明治二十九年一月三日にも訪問している）。子規庵の冬の寒さは、自身、体験していたのである。子規の句稿の一つ『病餘漫吟』の明治二十八年（一八九五）冬の項には、

漱石帰京せしに贈る

足柄はさぞ寒かつたでござんせう

の一句が見える。子規庵の会話でも「寒さ」が話題となつたことと思われる。そんな子規庵の冬を知っている漱石であつたので、子規に「暖炉」の設置を勧めたのである。そんな漱石からの手紙（現存していない）への返事としての右の近況報告である。

子規書簡中の「灯炉」については、明治三十二年（一八九九）十月六日付叔父大原恒徳（つねのり）（子規の母八重の弟）宛子規書簡中に、

此頃の寒さにさへ閉口仕候故、此冬（この）はいかゞあらんと氣遣敷、是非暖炉を据付んと希望二候処、高浜色々二世話いたしくれ、据付やらんとの事なりしが、何分費用のかかると日本家二不便なとて、暖炉代りの石油を焚く機械ニせんかと存候。

と見えるところの「暖炉代りの石油を焚く機械」、すなわち今日の石油ストーブのごときものであつたと思われる。これに加えての「ガラス障子」だったのである。先の露石宛書簡中に、

ガラス越に冬の日あたる病間哉
鳶見えて冬あた、かやガラス窓

と見えたように、あるいは、『俳句稿』の明治三十三年（一九〇〇）の「新年」の項に、

ガラス越に日のあたりけり福寿草

と見えるように、子規は、「昼間、日光をあびる」愉快を存分に味わつたことと思われる。

ちなみに歌人伊藤左千夫、岡麓等の尽力によつて、子規庵に石炭を用いる「ストーブ」（暖炉）が設置されたのは、明治三十三年（一九〇〇）十一月十三日のこと。子規は、明治三十三年（一九〇〇）の冬、

ガラス戸や暖炉や庵の冬構

暖炉タクヤ雪紛々トシテガラス窓

の二句（前の句は『俳句稿』所収、後の句は河東碧梧桐宛書簡中に見える）をものしている。

少しく論が横道にそれた。件の漱石宛子規書簡の末尾は、注目すべき次のような記述で閉じられている（句末の四句省略）。

朝は寐る、昼は人が来る、夜は熱が出る、熱を侵して筆を取るか、又は熱さめて後、夜半より朝迄筆取るか、いづれにしても体は横寐、右を下、右の脇をついて、左の手に原稿紙を取り、物書くには原稿紙の方より動かして行く。不都合な事、苦しい事、

時間を要する事、意図つて筆従はざるために幾度か蹉跌して（筆者注・つまずいて）勢のぬける事、弊害と困難は数へきれぬ程に候。其上に外出して材料を拾ひ出す事が出来ぬといふ大不便あり。仏様に聞たら、小生の前身は、余程の悪人なりし事と存候。

子規が、洋画家中村不折と出会い、親交を結ぶようになったのは、明治二十七年（一八九四）のこと。その結果、「写生」論を確立していくのである。その当時は振り返つて、明治三十五年（一九〇二）四月刊の『獺祭書屋俳句帖抄上巻』（俳書堂・文淵堂合梓）の長文の序「獺祭書屋俳句帖抄上巻を出版するに就きて思ひつきたる所をいふ」の中に、

秋の終りから冬の初めにかけて、毎日の様に根岸の郊外を散歩した。其時は、何時でも一冊の手帳と一本の鉛筆とを携へて、得るに随つて俳句を書つた。写生の妙味は、此時に始めてわかつた様な心持がして、毎日得る所の十句、二十句位な獲物は、平凡な句が多いけれども、何となく厭味がなくて垢抜がした様に思ふて、自分ながら嬉しかつた。

と書き付けている。ここには「写生」を実践する子規がいる。また、それ（明治二十七年）より少し後、明治二十八年（一八九五）春の執筆かと推定される熊本池松辻巷に宛た子規の手紙の中には、

家の内でも句を案じるより家の外へ出て、实景に見給へ。实景は自ら句になりて而も下等な句にならぬなり。

と認めていたのである。「机上詩人」（同書簡）になることを、誰よりも嫌つた子規であつた。が、明治三十二年（一八九九）の末には、右に見た漱石宛子規書簡の末尾に報じられているごとき状態になつてしまつていたのである。俳句、短歌に「写生」を標榜した子規にとつては、まつたく意想外の展開となつてしまつたのである。漱石に告げる「外出して材料を拾ひ出す事が出来ぬといふ大不便あり」との文言に、子規の苦悶が窺知されよう。

その子規のほんの纒かな光明が、「暖氣」を得るために六畳の「病間」の南側に設えられた「ガラス障子」だったのである。子規は、「暖氣」のための「ガラス障子」を通して「家の外」と接することができたのである。

二、「ガラス障子」のある生活

子規は、随筆の中でも、しばしば「ガラス障子」について語っている。そこには、「ガラス障子」を通して「写生」する子規の姿を見出すことができる。

明治三十三年（一九〇〇）三月三十日に「日本新聞」に発表された随筆「我室」は、

六畳の間一つ、南に窓を開きて、病牀も、書齋も、

客室も、応接所も総てを兼ねてこゝに事をすまず身の上、我ながらむさくろしと思ふに、心ありて訪ひ来る人の話たけなはにして、灯炉のあたゝまりにのぼせたるたてつめの、透間漏る風の防ぎに白木うちそへて暖きを貪る外にかざり無き部屋の様はいふも事古りたれど、新しきに返す三十一文字のしらべ拙きが、なか／＼唾壺だく（筆者注・たんつぼ）を打ちて歌ひ出づるしはがれ声にかなひたるも一興あるべし。

と書き始められる。ここにおいて、この一文が、俳句交じりの「俳文」ではなく、短歌交じりの「和文」であることが、読者に伝えられているのである。人力車による外出も、めつつきり減つた明治三十三年（一九〇〇）、子規の関心は「我室」に向けられていったのである。そのような子規にとつての喜びは、しばしば注目しているように、その「室」が、「南に窓を開」（い） いていたことであつた。虚子の設えた「灯炉」も話題にのぼつている。

子規が「日本新聞」に「歌よみに与ふる書」を発表したのは、明治三十一年（一八九八）二月十二日（三月四日まで十回にわたつて連載）。翌三十二年（一八九九）二月初旬、香取秀真（か）、岡麓（お）の両歌人が、初めて子規庵を訪問。子規の関心が、俳句を凌ぐ勢いで短歌へと傾いていったのであつた。そんな中で執筆された「我室」であ

る。「新しきに返す三十一文字のしらべ」（新風短歌）への意欲は、並々ならぬものがあつたであらう。そんな中での「ガラス障子」からの「家の外」の「写生」である。「我室」の中の左の一節が注目される。

ガラス窓にたてこめて、火鉢、湯婆たんぼ、身はあたゝかに、見れば外の寒げなるもをかしく。

まだ浅き春をこもりしガラス戸に寒き嵐の松を吹く見ゆ

ここで、右の短歌一首中で用いられている「ガラス戸」なる措辞に特に注目してみたい。先に見た「ガラス戸や暖炉や庵の冬撞」の句は、左の短歌より後の成立である。成立の前後が定かでないが、ほぼ同時期の俳句作品に、

ガラス戸の外を飛び行く胡蝶哉

がある。俳句における「ガラス戸」なる措辞の使用例は、此の二句だけ。子規の中で、「ガラス戸」なる措辞は、もつぱら短歌の中で定着していくのであるが、そのことは、もう少し後で述べる。

同じく明治三十三年（一九〇〇）四月十日発行の「俳星」第一巻第二号掲載の随筆「春浅き庵」の中にも「写生」する子規の姿をかいま見ることができるとして、ここでは、その「写生」が、俳句として形象化されている。左のごとし。

去年の暮、病室の南側をガラス障子にせしより、何

かにつけて嬉しき事ぞ多き。いつかはガラス越に雪も見んなど、出来ぬ贅沢とばかり思ひしに、今、まのあたり此樂を得て、命ものぶ心地なり。我は火鉢をかゝえながら松の枝の寒さうに動くを見るも、こよなく心行くさまなるに、雀の二、三羽来て、松に隠れ、地に下り、いそがしく物あさるも面白し。折々はめづらしき鳥も来るに、鶯を待ちこがれて、

鶯の来もせて松の雀かな

赤木格堂が伝えるところによると（大正九年三月十八日発行「柿渋」第七十一号所収「硝子の駕」参照）、明治三十三年（一九〇〇）一月七日は、大雪だったそうである。ちなみに、和田克司氏作成の「天候一覽」（増進会出版社版子規選集『子規の一生』所収）によると、一月七日は、曇、十日が雪となっている。また二十一日も雪。二月以降は、雪の日なし。いずれにしても、「ガラス越に雪も見ん」との子規の望みは、叶えられたのである。なるほど「嬉しき事」の一つであったであろう。子規は「命ものぶ心地なり」と語っている。

これも明治三十三年（一九〇〇）の十一月二十日発行の「ホトトギス」第四卷第二号に掲載の随筆「明治卅三年十月十五日記事」の中では「ガラス障子」の様子が、より具体的に明らかにされていて、興味をそそられる。冒頭すぐに左の描写が見える。

今朝、眼さめたるは五時頃なるべし。四隣猶静かに、母は今起き出でたるけはひなり。何となく頭なやましきに再び眠るべくもあらねば、雨戸を明けしむ。母来りて南側のガラス障子の外にある雨戸をあけ、窓掛を片寄す。外面は霧厚くこめて、上野の山も夢の如く、まだほの暗きさまなり。庭先の鶏頭、葉鶏頭にさへ霧かゝりて、少し遠きは紅の薄く見えたる、珍しき大霧なり。余は西枕にて、ガラス戸にや、背を向けながら、今母が枕もとに置きし新聞を取りて臥しながら読む。朝眼さむるや否や一瞬時の猶予も無く新聞を取つて読むは毎朝の例なり。

今一つ明らかにイメージし得なかつた「ガラス障子」の様態が活写されている。

愛弟子佐藤紅緑が明治三十五年（一九〇二）十一月二十五日発行の俳誌「木兎」第二卷第九号に寄せている「子規翁終焉後記」の最初の部分に、

翁の臥室はいつもの如く開け放されて、頭を座敷、即ち皆なが座つて居る方に向けたまゝ、位置は従来と少しも替らずに白き布団の上に身を横たへて居るのは翁である。

この描写があるが、子規は、日頃、臥床している六畳の「病間」に「西枕」で臥つていたのである。枕許が八畳の座敷（皆が座つて居る）所」というわけである。「座

敷」と「病間」との間には、襖四枚があつたのであるが、来客がある場合には開け放たれていたであろう。句会、歌会等、大勢の来客の場合には、襖は外はずされていたのではないかと思われる。「病間」の北側には、襖二枚を隔てて四畳半の「次の間」があるが、母八重、妹律は、ここに寝起きしていたのではあるまいか。他に二畳の「玄関」の間、三畳の「居間」等があつた。碧梧桐によれば、建坪は二十四坪余であつたという。しかして「病間」の南側に「ガラス障子」があるのであるが、先の子規自身の記述によつて、その外に「雨戸」があり、夜は通常閉められていたことがわかる。通常というのは、明治三十三年（一九〇〇）の十一月二十四日付の「日本新聞」に發表された隨筆「人の紅葉狩」では、十一月五日の夜「ガラス障子」より赤木格堂、山田三子、桃沢茂春、西田巴子等に訪問され、びつくりする描写があるからである。「雨戸」そして「ガラス障子」、さらにその内側に「窓掛」（カーテン）が備え付けられていたことが明らかにされている。「外面は霧厚くこめて、上野の山も夢の如く、まだほの暗きさまなり。庭先の鶏頭、葉鶏頭にさへ霧かゝりて、少し遠きは紅の薄く見えたる、珍しき大霧なり」——子規の「写生」の眼が「ガラス障子」の向う側を的確に描写している。右の子規の記述で留意すべきは、「ガラス障子」なる語と「ガラス戸」なる語が、数

行の中で併用されている点である。隨筆「人の紅葉狩」でも併用されている。子規の中で「ガラス障子」と「ガラス戸」が意識的に使い分けられているか否か、今一つ定かでないが、「ガラス戸」を用いた場合には「家の外」を見ようとする意識が強く働いているように思われる。

三、「ガラス戸」からの「写生」

子規は、明治三十一年（一八九八）二月二十四日付「日本新聞」に發表した「六たび歌よみに与ふる書」の中で、生（筆者注・子規）の写実と申すは、合理非合理、事实非事实の謂にては無之候。油画師は必ず写生に依り候へども、それで神や妖怪やあられもなき事を面白く書き申候。併し、神や妖怪を画くにも勿論写生に依るものにて、只有の儘を写生すると、一部々々の写生を集めるとの相違に有之、生の写実も同様に候。

と述べて、俳句で確立した「写生」「写実」の説を、短歌においても援用している。子規は、短歌革新をも「写生」の説で押し通したのである。そして、それを是としたのが、子規の周りに集まつた香取秀真、岡麓、伊藤左千夫等の歌人だったのである。ところが、明治三十一年よりも三十二年、三十二年よりも三十三年と、年を経るごとに「写生」のために「郊外を散歩」ということ

が困難な病状となつていつたのである(たとえ人力車を
用いたとしても)。そんな窮状を親友漱石に「外出して
材料を拾ひ出す事が出来ぬといふ大不便」と訴えたので
あつた。

が「写生」は、子規の文学の根幹にかかわるもの。そ
んな子規の「写生」の実践を辛うじて可能にしたものが、
今まで纏説してきた、子規の「病間」の南側に設えられ
た「ガラス戸」(「ガラス障子」)だったのである。

その「ガラス戸」によつて、子規は、「写生」の指導
をしているのである。そのことを明らかにしている貴重
な資料が岡麓によつて記された随筆「思出の記」中の「ガ
ラス戸」の節。初出は、昭和二十四年(一九四九)一月
から二十五年(一九五〇)一月にかけての歌誌「アララギ」
誌に発表されたものであるが、今、岡麓著『正岡子規』(白
玉書房、昭和三十八年十一月刊)によつて、左に掲出し
てみる。

明治三十三年の一月末のある日の午後、私は先生を
おたづねした。しばらくして先生が「歌をよまうか、
このガラス戸を題にして写生をしよう」といはれた。

やがて発表された詞書に、

わが病室の障子にガラスを張りてガラス障子の歌よ
みける中に

とある、このガラス戸から外が見えるのに興を覚え

られたらしかつた。一つにはまた私に写生といふ実
際教授をして下さらうとなされたのもあつた。暫
時無言、ガラスごしに景色を見てをられたが、原稿
紙へすらすらと書きつけられる。先生は歌でも句で
も文章にしても、あたまのなかでまとめて書きつけ
られる。(めつたに書きなほしをされない。先生の
原稿ぐらゐ、読みよく、きれいなのは稀であつた。)
私にはつかみ場所がわからなく、困つてみると、先
生の方はすらすらふえて行くのだつた。私は閉口し
てしまつた。すると「お見せなさい」と私のととり
かへて渡された。

いたづきの閨のガラス戸影透きて小松の枝に雀飛ぶ
見ゆ

病みこやる閨のガラスの窓の内に冬の日さしてさち
草咲きぬ(福寿草のこと)

朝な夕なガラスの窓によこたはる上野の森は見れど
飽かぬかも

冬ごもる病の床のガラス戸の曇りぬぐへば足袋干せ
る見ゆ

ビードロのガラス戸すかし向ひ家の棟の薺の花咲ける
見ゆ

雪見んと思ひし窓のガラス張ガラス曇りて雪見えず
けり

病みこもるガラスの窓の窓の外の物干し竿に鴉鳴く
見ゆ

物干に来居る鴉はガラス戸の内に文書く我見て鳴
くか

にひ年の朝日さしけるガラス窓のガラス透影紙鳶上
る見ゆ

ガラス張りて雪待ち居ればあるあした雪ふりしき
て木につもる見ゆ

暁の外の雪見んと人をして窓のガラスの露拭はしむ

常臥に臥せる足なへわがためにガラス戸張りし人よ
さらあれ

窓の外の虫さへ見ゆるビードロのガラスの板は神業な
るらし

これだけの歌が、一時間余に出来たのだと思ふ。私
のはよくよくの不出来だったもので、自分でも写生
の実際にかかる、かうもあがきがとれぬのか、と
思つた。先生の評なしでもどされた。私が先生の歌
を拝見してゐると「君なら足袋干せるなんぞいはな
いだらう。紅梅の花とでもいふだらう。」と苦笑さ
れた。眼前ガラス戸を透して、庭前の物干竿に足袋
が二足ぶらさがつてゐる。私は何とも返事をしかね
て、またしよげてしまつた。

子規が「ガラス戸」を通して「家の外」を「写生」す

る様子が、子規の歌十三首とともに活写されている。

麓は、右のエピソードを「明治三十三年の一月末のあ
る日の午後」と紹介している。先にも記したように、岡
麓が香取秀真とともに初めて子規庵を訪問したのは、明
治三十二年（一八九九）二月初旬のこと。爾来、約一
年が経過している。麓は、明治十年（一八七七）、東京
の生まれ。子規より十歳年少。この時、子規は、数え年
三十四歳。麓は、二十四歳である。麓が示している子規
の短歌十三首中の、

雪見んと思ひし窓のガラス張りて雪見えすけり
ガラス張りて雪待ち居ればあるあした雪ふりしきて
木につもる見ゆ

暁の外の雪見んと人をして窓のガラスの露拭はしむ

等に注目してみるならば、明治三十三年（一九〇〇）の
一月末の降雪は、二十一日（和田克司氏編「天候一覽」
参照）。この日の早朝、雪が降つたか。それはともかく、
先に注目した「ガラス戸」は、子規の歌においては、「ガ
ラス戸」の他に「ガラスの窓」「ガラス窓」「ガラス」
「ガラスの板」等、様々な呼称をもつて形象化されている。
中で「ガラス戸」が五首ということ、十三首中では使
用頻度が、最も高い。私は、先に、この言葉に「家の外」
を見ようとする子規の意識を指摘したのであったが、と
にかく「ガラス戸」なる言葉の使用例は、子規の歌稿『竹

乃里歌」を繙ひもといても、圧倒的に多い（「ガラス障子」なる語を使った歌は、一首もない）。今までに示したものを、すべて列挙してみる。

朝な夕なガラス戸の外外に紙鳶見えて此頃風の東吹く
なり

ガラス戸の外外に面さびしくふる雨に隣の桜ぬれはえて見ゆ
ガラス戸の外外に植ゑおける桜花ふむさくちる目もかれず見き

ガラス戸の外外に据エタル鳥籠ノブリキノ屋根二月映ル
見ユ

ガラス戸ノ外外八月アカシ森ノ上ニ白雲長クタナビケル
見ユ

紙ヲモテラムプオホヘバガラス戸ノ外外ノ月夜ノアキラケ
ク見ユ

夜ノ床ニ寐ナガラ見ユルガラス戸ノ外外アキラカ二月フケ
ワタル

ガラス戸ノ外外ノ月夜ヲナガムレDRAMプノ影ノウツリテ
見エズ

ホト、ギス鳴クニ首アゲガラス戸ノ外外面ヲ見レバヨキ月
夜ナリ

ガラス戸ニ音スル夜ノ風荒レテ庭木ノ梢ユレサワグ見ユ
ガラス戸の外外に咲きたる菊の花雨に風にも我見つるかも

右に楹左に桜真日向きに上野の杉の見ゆるガラス戸

春の日の雨しき降ればガラス戸の曇りて見えぬ山吹の花
ガラス戸のくもり拭へばあきらかに寐ながら見ゆる山
吹の花

ガラス戸におし照る月の清き夜は待たずしもあらず山
ほととぎす

ガラス戸の外外面に咲けるくれなゐの牡丹の花に蝶の飛
ぶ見ゆ

「ガラス戸」以外の歌は、すでに触れている以外では、
うら、かにガラスを照す春の日にはかに曇り電ふり
来る

ほととぎす今年は聞かずけだしくも窓のガラスの隔てつ
るかも

の二首に過ぎない。そして右の「ガラス戸」使用例十六首の中で十一例は「外」なる言葉とともに用いられているのである。子規が歌の中で「ガラス障子」ではなく「ガラス戸」を用いたのは、無論「ガラス障子」が六音、「ガラス戸」が四音であり、「調べ」にかかわる要素も大きいであろうが、それ以上に前に記しておいたように、そこには「家の外」を見ようとすると子規の意識が強く働いている、と見てよいように思われる。十六例中十一例が「外」なる言葉とともに用いられていることが、その証左となるろう。

そこで、急ぎ岡籬の随筆「ガラス戸」の内容に戻る。

麓が伝えるエピソードの中で最も注目されるのが、子規の言葉「歌をよまうか、このガラス戸を題にして写生をしよう」、であろう。この言葉を子規が発しているのが治三十三年（一九〇〇）一月末。人力車での外出も儘ならない状態となっていた。が、子規は、あくまでも「写生」に固執しているのである。この段階で子規に可能な真の意味での「写生」は、「ガラス戸ノ外」しかなかったのである。麓は、子規の心中を「ガラス戸から外が見えるのに興を覚えられたらしかった」と忖度しているが、そういうことであつたであろう。虚子が「暖気」のために設えてくれた「ガラス障子」「ガラス戸」の、「暖気」以上の効用であつたのである。今までに見てきたように「ガラス戸を題にして写生」した作品が、俳句より短歌に集中しているのは、これもすでに指摘したように、子規の関心がより多く短歌実作に傾いていたということであつたからであろう。

麓は、「二つにはまた私に写生といふ實際教授をして下さらうとなされたのもあつた」とも記している。子規は、徹頭徹尾「写生」の人であつた。その「写生」の説を良しとする人々が、俳人のみならず歌人にも沢山いて、子規を取り囲んでいたのである。数え年三十六歳の短い病臥の生涯であつたが、子規は幸福な文学者であつた。多くの門人たちとともに「ガラス戸ノ外」を凝視し、

それを俳句に、短歌に、文章にと形象化していったのであつた。自らの「写生」論を駆使して。